令和6年度　世田谷区立中里小学校　研究構想図

教育目標　健康でたくましい子ども　　よく考え、最後までやりぬく子ども　　仲よく助けあう子

昨年度の研究の成果

○運動を楽しみ、生き生きと取り組む姿が見られた。
○友達同士で学び合う姿が見られた。
○友達同士で励まし合うなど、温かい関わりがたくさん見られた。
○教員自身が体育科の基礎知識・技術を学ぶことができた。

昨年度の研究の課題

○学び合う視点や方法が児童に根付いていなかった。
○個別練習や学び合いでは、十分な主体性が発揮されなかった。
○個別練習や学び合いによる運動習得の成果が不十分だった。
○ＩＣＴの活用が不十分だった。

研究主題　**運動楽しい！大好き！**
～「個別最適な学び」と「協働的な学び」のスパイラルを通して～

研究仮説

各運動領域において、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を効果的に取り入れ、課題解決を積み重ねていくと、児童に「運動楽しい！大好き！」をより深く体感させることができるであろう。そして、各運動領域における資質・能力を高めることができるであろう。

児童の実態

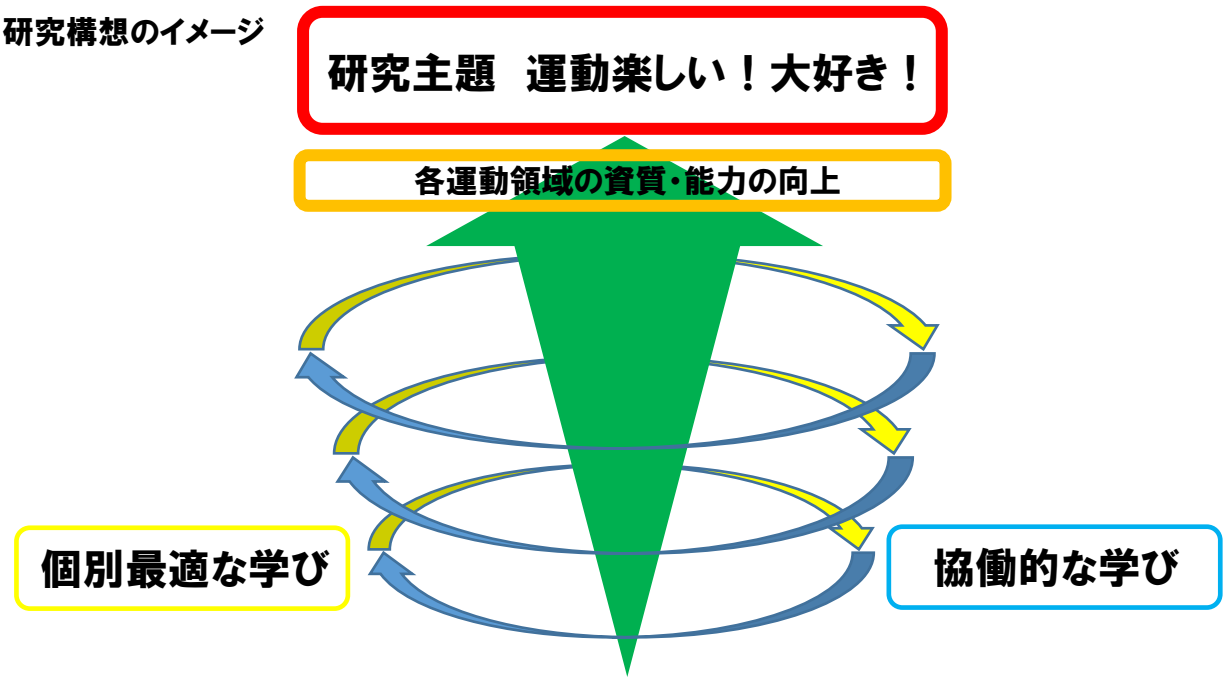
低学年	中学年	高学年
○運動が好きな児童が多く、主体的に取り組む力がある。 ○経験の差による技能の差がある。 ○友達の動きや運動に目を向ける態度は育っていない。 ○関わり合いながら、共に運動する経験が少ない。	○主体的に取り組む児童が多く、集中して活動に取り組むことができる。しかし、主体的に取り組むことができない児童もいる。 ○「もの」「こと」には夢中になって向き合うが、「人」に対する意識が薄い。 ○言葉によるコミュニケーションでトラブルになることが多い。そのため、自分の持てる力で取り組む姿が多く、協働までいかない。 ○技能面では、差が大きい。	○運動が好きな児童が多く、主体的に取り組む力がある。 ○新しいことに挑戦するたびに戸惑いが見られる児童がおり、すぐに諦めてしまう姿が見られる。 ○運動が好きでない児童や苦手な児童も、意欲が高まってきている。 ○学習カードに作戦を表現することや、こつなどを伝え合うことに課題がある。 ○技能面は、全体的には高いが差が大きい。 ○勝敗へのこだわりが強く、気持ちの切り替えが苦手な児童が多い。

目指す児童像

「個別最適な学び」と「協働的な学び」を通して、主体的に運動の楽しさを味わい、資質・能力を高めていく児童

	低学年	中学年	高学年
知識及び技能	○友達と一緒に運動遊びをしながら、取り組む動きや行い方を知り、楽しく取り組むことができる子	○他者と協働的に学びながら、自分が取り組む動きについて知るとともに、技能を身に付けるためのポイントを実践する子	○他者と協働的に学びながら、自分が取り組む活動について詳しく知るとともに、自分の動きの高まりが分かる子
思考力、判断力、表現力等	○友達のよい動きを見付けてそれを真似たり、自分に合った練習を選んで自分の動きを工夫したりできる子	○他者と互いの動きを見合ったり、補助し合ったりして協働するとともに、自分の課題を解決するための適した練習方法を選択できる子	○他者と互いの動きを見合ったり、補助し合ったりして協働するとともに、自分や友達の学習状況を把握し、課題を解決するための適した学習活動を改善できる子
学びに向かう力・人間性等	○運動の行い方やきまりを守り、友達と声を掛け合って仲良く取り組みながら、すすんで運動に取り組もうとする子	○自分や友達の学習成果に興味をもち、自ら学びのサイクルを回してみようとしたり、課題に応じて練習方法を選択したりしようとする子	○自分や友達の学習成果に興味をもち、試行錯誤を重ねて、課題を解決しようとする子

研究構想のイメージ



学習着眼点

個別最適化 ≒ 個に応じた指導（教師視点）

指導の個別化
個別に指導・教材の提供

学習の個性化
子ども自身の最適な学び

中里小が捉える「個別最適な学び」と「協働的な学び」

○「個別最適な学び」とは、
　自分の課題が何かに気付き、それに応じた課題解決方法を考え、課題解決に取り組むこと
　→なりたい姿が自分のしていることとずれていないか（自己調整力）

○「協働的な学び」とは、
　問題を自分事として捉え、その問題を解決するために、自分の考えを伝え合ったり教え合ったりすること

研究の視点・手立て

（１）「個別最適な学び」と「協働的な学び」の定義付けと、
　　その中里版の明確化

（２）「個別最適な学び」と「協働的な学び」をしたいと
　　児童が感じるための指導の工夫
　○言葉掛けの工夫（問いかけの言葉、つなぐ言葉、深める言葉）
　○単元計画・一単位時間の工夫（単元計画のいつ、本時のどこで、
　　どんな児童の反応の時に）

（３）効果的な「個別最適な学び」と「協働的な学び」の
　　在り方の模索
　○タブレットの利活用（必要性）
　（撮影、見合う、課題確認、改善点を話し合う、再び撮影など）
　○単元の中でどこが対話に向いているか。
　（共通の課題の共有→対話の必然性）

研究の成果を何で見取るか？
○意識調査の変容
→年度初めと年度末に
　児童・教員アンケートを実施
○日常の授業での変容
→写真・ノート・学習感想等で
　記録を残す。
○体力テスト（数値で評価）

研究のその先に・・・　「個別最適な学び」と「協働的な学び」という方法論の他教科・領域への応用（学び方を体育科で学ぶ）
⇒自己肯定感・自己有用感の涵養（＝「中里WAY」の実践）